

## 攻撃性と IWM (Internal Working Model) が虐待認知に及ぼす影響

佐藤友美\* 大鷹円美\*\* 菅原正和\*\*\*

(2011年3月4日受理)

Tomomi SATO, Marumi OTAKA, and Masakazu SUGAWAWA

Effects of Aggressiveness and Internal Working Model (IWM)  
for Abuse Recognition

### 要 約

虐待認知とは、他者が保護者（親またはそれに準ずる養育者）の攻撃的行動を見たときに、虐待として認知するかどうかの程度を表す。この程度の違いには個人差があり、どのような要素が虐待の認知差に影響を与えているかを検討する。本研究の主な目的は、大学生を対象に、虐待認知と攻撃性・IWMとの関連で、「1）攻撃性の高い者は自身が攻撃的であるために、他者が攻撃を加えている場面を見てもそれほど被害者の心が傷ついているとは思わず、その行為を虐待と認知する程度が低くなる可能性がある、2）親とのIWMにおいて信頼（secure）得点の高い者は、低い者よりも、ある攻撃的行動を虐待と認知する可能性が高くなる」の二点を仮説に掲げ、攻撃性とIWMが虐待認知に及ぼす影響を明らかにすることであった。

その結果、虐待認知と Buss-Perry 攻撃性尺度における身体的攻撃との間で負の相関があり、身体的攻撃性の高いものは虐待を認知する程度が低くなり、よって1）の仮説は支持された。仮説2）は今回の調査では有意な差が見られず、棄却された。

**Keyword:** 虐待認知、内的ワーキングモデル

(IWM)、Buss-Perry 攻撃性尺度、状態—特性怒り尺度 (STAS)

### 1. 問題と目的

平成20年度の全国での児童虐待相談対応件数は42,662件にのぼり、平成2年の1,101件から年々増加の傾向にある (Fig.1)。これは子どもの権利条約の批准、児童虐待の防止等に関する法律の平成12年11月施行、電話相談などの虐待対策事業が発足される等により、社会一般的に家庭内においての虐待に関する関心や意識が高くなったことが増加の一因として推察される (中嶋 2005)。Fig.1は、実際に起こる虐待が増加しているということではなく、あくまで報告されている件数の増加を示している。虐待の実際件数が過去と比較して増加していることを実証するデータではないが、人が虐待行為をどの程度認知するかが、相談対応件数に影響を及ぼしていることが、この背景から読み取れると考えられる。

親の攻撃的行動を見たときに、虐待とみなすかどうかを虐待認知 (中嶋2005) という。一般に人は、親のどのような行動をみて虐待とみなすのであろうか。その認識の程度は個人によって異なり、少なからず虐待の通報や発見に影響を与えている。

\* 尚絅学院大学大学院総合人間科学研究科 \*\* 盛岡医療福祉専門学校 \*\*\* 岩手大学名誉教授

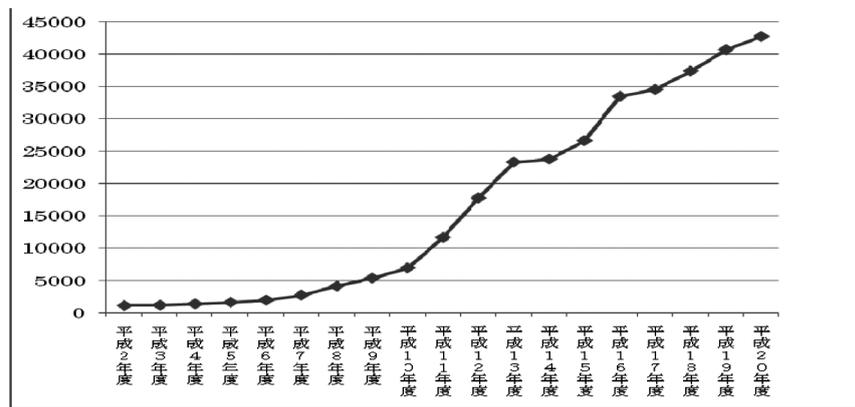


Fig.1 全国の児童虐待相談対応件数の推移（厚生労働省報道発表用資料）

個人間で虐待の認知が異なれば、ないがしろにされてしまう虐待事件も増加している可能性を否定する事は出来ず、対応の遅れが、尊い命を奪ってしまうことも考えられる。養育上好ましくないとみなされる親の暴力行為や発言を虐待とみなしにくい人格特性を探る手掛かりとして、内的作業モデル（Internal Working Model: 以下 IWM）を用い評価した。IWM は、J. Bowlby（1969,1973,1980）によって提唱された愛着に関する表象モデルで、他者と自己の関係において各個人がもつ認知的枠組みを指す（菅原・田村・嶋野 2004）。ここでは、詫摩・戸田（1988）によって開発された成人の IWM を測定する内的作業モデル尺度を使用している。IWM は他者と自己の関係に関する心的表象を指す。この表象は発達に伴って出会うさまざまな愛着対象との間での愛着に関連した出来事を要素として、個人の内部に体制化されていく（詫摩・戸田1988）。成人の内的作業モデルを評価する場合、乳幼児期の愛着スタイルに対応した3つの下位尺度（secure, ambivalent, avoidant）で構成されている。Secure は、他者是对应的で自己は援助される価値のある存在という表象をもつ。Ambivalent は、他者に対して信頼と不信の動揺的表象をもち、自己不全感が強い avoidant は、他者は拒否的で援助が期待できないことから、これを補完するためにきわめて自己充足的な存在という自己に関する表象をもつ。次に、個人の攻撃性を測定することにより、ある攻撃行動を重要な事案としてとらえるか、もしくは軽視するかを虐待認

知との関連で見ていった。攻撃性は、いくつかの構成概念からなる複合的な特性としてとらえられる。ここでは、攻撃性の情緒的側面である「短気」、認知的側面である「敵意」、行動的側面である「身体的攻撃」および「言語的攻撃」の4つの下位尺度からなる日本語版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（以下 BAQ）（安藤他, 1999）を使用し、攻撃性の多面的特性（Buss & Perry, 1992）を測定する。また、情動状態としての怒りの強さを示す「状態怒り（State Anger）」と、パーソナリティ特性としての怒りやすさの個人差を測定する「特性怒り（Trait Anger）」の2つの尺度からなる Spielberger の状態-特性怒り尺度（State-Trait Anger Scale: 以下 STAS）（Spielberger, 1988）を併せて用い、攻撃性のどの特性が虐待認知に影響を及ぼすかを測定した。以上の2つの観点（IWM、攻撃性）から、後記の2つの仮説を立てた。児童虐待は、家庭内という他人には簡単に関知できない閉鎖的な環境で行われ、他人が容易に干渉することが困難な状況で起こるために、その周囲が意識して見なければ問題に上がりにくい側面がある。また被害者である子どもが中々自らの置かれている状況を他者に話さず、追求しても加害者である親を庇うこともしばしある。このようにして見逃され易い虐待を極力減らすための方向性を見出すことを念頭に、本研究では虐待を認知する程度に、個人の愛着スタイル、また攻撃性が影響を及ぼしているか否かを調べた。

## II. 仮 説

- 1) 攻撃性の高い者は、自身が攻撃的であるために、他者が攻撃を加えている場面を見てもそれほど被害者の心が傷ついているとは思わず、その行為を虐待と認知する程度が低くなる可能性がある。
- 2) IWM との関係では、secure 得点の高いものは、低いものより、ある攻撃的行動を虐待と認知する程度が高くなる可能性がある。

## III. 方 法

調査対象：大学1～3年生168名（男性71名、女性77名、不明20名）

調査時期：2009年10～11月

調査方法：回答は無記名式。すべての質問は、

- 1（とても当てはまる）～5（全く当てはまらない

い) の5件法で聞き、1→4点、2→3点、3→2点、4→1点、5→0点で得点化した。虐待認知に関する項目（中嶋2005）を大学生向けに表現を一部改変し、「しつけのため」などの認知に影響を及ぼすフレーズや、明らかに性犯罪とみなされる行為を削除した。あくまで親の行動に限定した事象として質問した（Appendix 1）。IWM に関しては、内的作業モデル尺度を用いた（Appendix 2）。IWM とは、子どもが愛着対象との日々の具体的相互作用を通して徐々に愛着対象への接近可能性および愛着対象の情緒的対応性等に関する主観的確信をもつこと、及び自己と他者の関係全般に関する一般化された表象のことで仮定されている（Bowlby 1969, 1973, 1980）。この表象は、子どもが愛着対象との日常的で長期的な相互作用を通して形成していくものとされる（金政2007）。攻撃性に関しては、日本版 Buss-Perry 攻撃性質問

### Appendix 1 虐待認知に関する項目

1. 乳幼児を戸外（ベランダ、外）に閉め出した。
2. 子どもの高熱を座薬によって無理に下げ、次の日は保育園や学校に連れて行く。
3. 自分の異性体験（性交の様子なども含む）を、あからさまに子どもに話す。
4. 乳幼児が泣き始めても、無視してだっこしない。
5. カラオケなどで遊んでいて、家に帰らず、小さな子どもの世話をしない。
6. 酔うと、子どもを叩いている。
7. 乳幼児の世話を嫌がり、食事を与える回数が足りない。
8. 子どもにポルノビデオを見せる。
9. 子どもに「あんたなんか生まれてこなければよかった」と言う。
10. 子どもを叩いたが、ケガやあざは生じなかった。
11. 子どもに慢性の病気があり、生命に危険があるのに病院に連れて行かない。
12. 容姿を気にしている子どもに、「お前はブサイクだね」などと欠点を言う。
13. 就学前の子どもを押入れに置いておいた。
14. パチンコをしている間、乳幼児を車の中に残す。
15. 思春期の異性の子どもとお風呂に入る。
16. 子どもを頭ごなしに大声でどなる。
17. ギャンブルや酒にお金を使ったため、子どもの給食費が払えない。
18. 思春期の娘の胸をさわる。
19. 親の考え通りに行動するように、子どもに選択の余地を与えない。
20. 洗濯をあまりせず、子どもに不衛生な服を着せている。
21. 風呂から裸のまま出て、思春期の子の前を歩く。
22. 親の帰りが遅いため、いつも就学前の子どもだけで夕食を食べている。
23. 子どもが話しかけてきても、一切無視して答えない。
24. 子どもが大切にしているおもちゃを捨てる。

25. 嫌がる就学前の子どもに、受験勉強を強要する。
  26. 他のきょうだいと比べて「お前はだめだ」と言う。
  27. 嫌がる子どもの髪を切る。
  28. 子どもを叩いたら、あざができた。
  29. 家出した子どもが帰ってきてても、家に入れない。
  30. 子どもの性器をみだりに触る。
  31. 子どもの身体を蹴った。
  32. 子どもが興味を示していることに、関心がないので、話しかけてきても、聞き流す。
  33. 親の好みで子どもに露出度の高い服を着せる。
  34. 子どもが精神的に不安定なのに、専門的な診断や援助を受けに連れて行かない。
  35. 子どもが刃物で遊んでいるのに、止めない。
  36. 子どもを長時間、立たせておいた。
  37. 買い物をする間、乳幼児を車の中に残しておいた。
  38. 夜に就学前の子どもを寝かしつけて、子どもをおいて遊びに出かける。
- 

#### Appendix 2 内的作業モデル (Internal Working Models)

---

1. 私は知り合い（友だち）が得意やすい方だ。
  2. 私はすぐに人と親しくなる方だ。
  3. 私は人に好かれやすい性質だと思う。
  4. 気軽に頼ったり頼られたりすることができる。
  5. 初めて会った人とでもうまくやっていける自信がある。
  1. 私は知り合い（友だち）が得意やすい方だ。
  2. 私はすぐに人と親しくなる方だ。
  3. 私は人に好かれやすい性質だと思う。
  4. 気軽に頼ったり頼られたりすることができる。
  5. 初めて会った人とでもうまくやっていける自信がある。
  6. 人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある。
  7. 自分を信用できないことが良くある。
  8. あまり自分に自信がもてない方だ。
  9. 私はいつも人と一緒にいたがるので、ときどき人から疎まれてしまう。
  10. ちょっとしたことでも、すぐに自信をなくしてしまう。
  11. 人に頼るのは好きではない。
  12. 私は人に頼らなくても、自分一人で充分にうまくやって行けると思う。
  13. あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう。
  14. 人は全面的には信用できないと思う。
  15. どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれしい態度をとられると嫌になってしまう。
-

## Appendix 3 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙

- 
1. 意見が対立したときは、議論しないと気がすまない。
  2. どんな場合でも、暴力に正当な理由があるとは思えない。
  3. 誰かに不愉快なことをされたら、不愉快だとはっきりいう。
  4. ちょっとした言い合いでも、声が大きくなる。
  5. 相手が先に手を出したとしても、やり返さない。
  6. かっとなることを抑えるのが難しいときがある。
  7. 陰で人から笑われているように思うことがある。
  8. ばかにされると、すぐ頭に血がのぼる。
  9. 友達の意見に賛成できないときには、はっきり言う。
  10. 私を苦しめようと思っている人はいない。
  11. いらいらしていると、すぐ顔に出る。
  12. じゃばる人がいても、たしなめることができない。
  13. たいした理由もなくかっとなることがある。
  14. 挑発されたら、相手を殴りたくなるかもしれない。
  15. 私を嫌っている人は結構いると思う。
  16. 人とよく意見が対立する。
  17. 人を殴りたいという気持ちになることがある。
  18. 人からばかにされたり、意地悪されたと感じたことはほとんどない。
  19. 権利を守るためには暴力のやむを得ないと思う。
  20. 嫌いな人に出会うことが多い。
  21. 殴られたら、殴り返すと思う。
  22. 自分の権利は遠慮しないで主張する。
  23. 友人の中には、私のことを陰であれこれ言っている人がいるかもしれない。
  24. かっとなって、物を壊したくなることがある。
-

## Appendix 4 状態－特性怒り尺度 (State-Trait Anger Scale 以下 STAS)

## 状態

1. 怒り狂っている。
2. いらいらしている。
3. 怒りを感じている。
4. 誰かを怒鳴りつけたい。
5. 何かを壊してしまいたい。
6. 逆上している。
7. 机をばんばん叩きたい。
8. 誰かを殴りたい。
9. 精根つきてしまった。
10. 口汚くののしりたい。

## 特性

1. 気が短い。
2. 怒りっぽい。
3. せっかちである。
4. 他人の間違いで自分が遅れたりすると腹を立てる。
5. 良いことをしたのに認められないといらいらする。
6. すぐかっとなる。
7. 怒ると意地悪なことをいう。
8. 人の前で非難されたりすると怒りを感じる。
9. 自分のしたいことが出来ないと誰かを叩きたくなる。
10. 良いことしてもほめられないと腹が立つ。

紙 (以下 BAQ) と Spielberger の状態 - 特性怒り尺度 (State-Trait Anger Scale 以下 STAS) の二種類を用いた (Appendix 3, 4)。BAQ は、攻撃性の多面的特性を捉えることができ (4 因子構造)、STAS は情動状態としての怒りの強さとパーソナリティ特性としての怒りやすさの個人差を測定できる。

## IV. 結 果

本調査の有効回答は148名、有効回答率は88.1%であった。虐待認知と IWM、BAQ、STAS について、それぞれの相関係数を Table 1 に表示した。その結果、虐待認知と BAQ の身体的攻撃との間で負の相関があり ( $p<.01$ )、身体的攻撃に関する攻撃性の高いものは、虐待を認知する程度が低い事が示された。また、STAS の状態怒り尺度にお

いても、虐待認知との間に弱い負の相関が見られ ( $p<.05$ )、このことから攻撃的な者は、イライラしていたり何かに怒りを感じているときに暴力行為を目撃しても、さほど重大なこととは思わず、虐待認知の程度が低くなる可能性を示唆している。

しかし、IWM においては虐待認知に関して有意な差が見られず、今回の調査で仮説 2) は棄却された。

次に、虐待認知と IWM、BAQ、STAS の各構成因子の低群・中群・高群ごとの平均値、標準偏差及び分散分析結果を Table 2 に示す。BAQ の身体的攻撃性の群間において有意な差がみられ、やはり身体的攻撃性の高い群は虐待認知の程度が低いことが明らかとなった (Fig.2)。

Table 1 相関係数

		言語的	短気	敵意	身体的	secure	ambivalent	avoidant	虐待認知	特性	状態
言語的	Pearson の相関係数	1	.198 *	-.162 *	.302 **	.297 **	-.212 **	.000	-.088	.191 *	.109
	有意確率 (両側)		.010	.036	.000	.000	.006	.999	.256	.013	.160
	N	168	168	168	168	168	168	168	168	168	168
短気	Pearson の相関係数	.198 *	1	.410 **	.469 **	-.083	.174 *	.006	.040	.601 **	.331 **
	有意確率 (両側)	.010		.000	.000	.667	.024	.942	.606	.000	.000
	N	168	168	168	168	168	168	168	168	168	168
敵意	Pearson の相関係数	-.162 *	.410 **	1	.340 **	-.211 **	.313 **	.201 **	.054	.366 **	.227 **
	有意確率 (両側)	.036	.000		.000	.006	.000	.009	.491	.000	.003
	N	168	168	168	168	168	168	168	168	168	168
身体的	Pearson の相関係数	.302 **	.469 **	.340 **	1	-.088	.081	.152 *	-.276 **	.457 **	.351 **
	有意確率 (両側)	.000	.000	.000		.623	.694	.048	.000	.000	.000
	N	168	168	168	168	168	168	168	168	168	168
secure	Pearson の相関係数	.297 **	-.083	-.211 **	-.088	1	-.086	-.304 **	.015	-.029	.008
	有意確率 (両側)	.000	.667	.006	.623		.639	.000	.847	.713	.918
	N	168	168	168	168	168	168	168	168	168	168
ambivalent	Pearson の相関係数	-.212 **	.174 *	.313 **	.081	-.086	1	.066	.079	.088	.103
	有意確率 (両側)	.006	.024	.000	.694	.639		.468	.309	.208	.182
	N	168	168	168	168	168	168	168	168	168	168
avoidant	Pearson の相関係数	.000	.006	.201 **	.152 *	-.304 **	.066	1	-.021	.020	.163 *
	有意確率 (両側)	.999	.942	.009	.048	.000	.468		.784	.798	.035
	N	168	168	168	168	168	168	168	168	168	168
虐待認知	Pearson の相関係数	-.088	.040	.054	-.276 **	.015	.079	-.021	1	.018	-.174 *
	有意確率 (両側)	.256	.606	.491	.000	.847	.309	.784		.821	.024
	N	168	168	168	168	168	168	168	168	168	168
特性	Pearson の相関係数	.191 *	.601 **	.366 **	.457 **	-.029	.088	.020	.018	1	.318 **
	有意確率 (両側)	.013	.000	.000	.000	.713	.208	.798	.821		.000
	N	168	168	168	168	168	168	168	168	168	168
状態	Pearson の相関係数	.109	.331 **	.227 **	.351 **	.008	.103	.163 *	-.174 *	.318 **	1
	有意確率 (両側)	.160	.000	.003	.000	.918	.182	.065	.024	.000	
	N	168	168	168	168	168	168	168	168	168	168

\*  $P < .05$

\*\*  $P < .01$

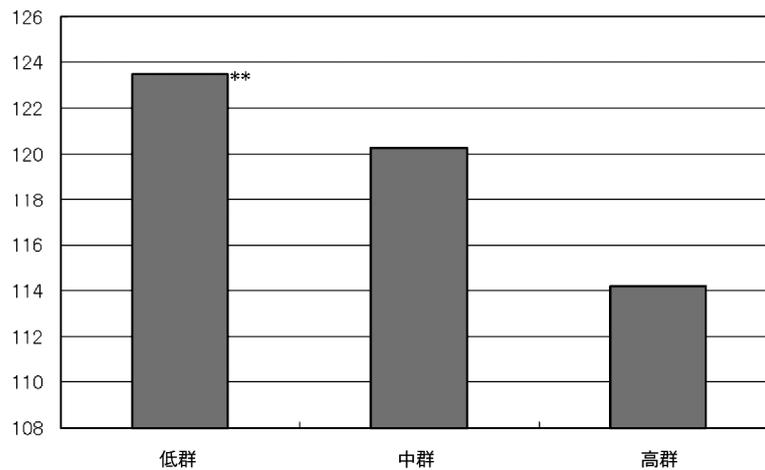


Fig.2 Buss-perry (BAQ) の第4因子 (身体的攻撃) の群ごとの (average  $\pm$  1/2 SD) の虐待認知平均値 (\*\*  $p < .01$ )

Table 2 虐待認知と IWM, BQA, STAS 各群の平均値、標準偏差値差及び分散分析

言語の群ごとの平均値、標準偏差および分散分析							
言語	低群		中群		高群		分散分析結果 F(2,165)
	M	SD	M	SD	M	SD	
虐待認知	121.07	17.14	115.82	21.76	116.93	21.076	1.06
短気の群ごとの平均値、標準偏差および分散分析							
短気	低群		中群		高群		分散分析結果 F(2,165)
	M	SD	M	SD	M	SD	
虐待認知	17.17	2.22	23.28	3.36	20.36	2.63	0.196
敵意の群ごとの平均値、標準偏差および分散分析							
敵意	低群		中群		高群		分散分析結果 F(2,165)
	M	SD	M	SD	M	SD	
虐待認知	112.64	23.25	120.78	18.25	118.18	19.94	1.10
身体の群ごとの平均値、標準偏差および分散分析							
身体	低群		中群		高群		分散分析結果 F(2,165)
	M	SD	M	SD	M	SD	
虐待認知	123.49	18.272	120.25	17.66	114.19	21.203	3.364
							** P<.01
secureの群ごとの平均値、標準偏差および分散分析							
secure	低群		中群		高群		分散分析結果 F(2,165)
	M	SD	M	SD	M	SD	
虐待認知	115.91	18.16	121.23	19.34	116.67	22.36	1.15
ambivalentの群ごとの平均値、標準偏差および分散分析							
ambivalent	低群		中群		高群		分散分析結果 F(2,165)
	M	SD	M	SD	M	SD	
虐待認知	116.15	22.02	119.19	20.45	118.26	18.78	0.28
avoidantの群ごとの平均値、標準偏差および分散分析							
avoidant	低群		中群		高群		分散分析結果 F(2,165)
	M	SD	M	SD	M	SD	
虐待認知	120.39	20.96	114.72	21.05	118.14	17.63	1.18
特性の群ごとの平均値、標準偏差および分散分析							
特性	低群		中群		高群		分散分析結果 F(2,165)
	M	SD	M	SD	M	SD	
虐待認知	113.48	21.25	115.06	14.71	119.28	20.4	1.11
状態の群ごとの平均値、標準偏差および分散分析							
状態	低群		中群		高群		分散分析結果 F(2,165)
	M	SD	M	SD	M	SD	
虐待認知	119.34	19.44	112.54	23.04	114.65	21.32	1.19

## V. 考 察

今回の調査で、「攻撃性の高い者は、自身が攻撃的であるために、他者が攻撃を加えている場面を見てもそれほど被害者の心が傷ついているとは思わず、その行為を虐待と認知する程度が低くなる可能性がある」という仮説は支持された。

人々の児童虐待の発見や気づきの意識を高めるためには、個人の攻撃性の影響を加味して、一般的にどの行動のどの程度までが虐待と見なされるべきなのかを、教育的に指導していくことが1つの方法として有効であろう。個人の感覚によって虐待を見逃してしまう危険性を回避するために、児童相談所などで専門家が虐待と判断する基準となるリスクアセスメントの観点から、どこで虐待と判定すべきかを客観的に捉えられるような指導環境を学校教育なり、育児の現場なりで取り入れていくことで、主観的な個人の感覚による判断の甘さを減らしていくことが可能だと考えられる。またこのことは、虐待の実際の件数を減らすためにも1つ有効な手段であろう。元来攻撃的である者は他人の攻撃的行動を見ても重要視しない傾向があるために、気付かぬうちに自身が加害者になりうる可能性もはらんでいる事が示された。人の攻撃性を変化させることは難しくとも、客観的に物事を知識として取り入れる事で、人の行動を変える事が可能であると考え。IWMの3つの因子、即ち secure, ambivalent, avoidant は BAQの4因子に影響を与えるが、虐待認知には影響を及ぼしていない。STASの特性攻撃も虐待認知には影響なく、状態攻撃性のみが影響する点は注目すべきである。そして、攻撃性一般が虐待認知に影響するのではなく、身体的攻撃性のみが影響する点も注目に値する。虐待防止の抜本的な解決策が社会的になされ、これからも虐待防止の方策を追求していくことが、これからの子ども達の為の重要な課題である。

## 引用文献

- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子 (1999). 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性, 信頼性の検討 心理学研究, 70, 384-392.
- Bowlby, J. (1969) Attachment and Loss: Vol. 1. Attachment. Basic, New York.
- Bowlby, J. (1973) Attachment and Loss: Vol. 2. Separation. Basic, New York.
- Bowlby, J. (1980) Attachment and Loss: Vol. 3. Loss. Basic, New York.
- Buss, A. H., & Perry, M. (1992) The aggression questionnaire. Journal of Personality and Social Psychology, 63, 452-459.
- 金政祐司 (2007). 青年・成人期の愛着スタイルの世代間伝達—愛着は繰り返されるのか— 心理学研究, 78, 398-406.
- 厚生労働省ホームページ (2010). 全国の児童虐待相談対応件数の推移 厚生労働省報道発表用資料.
- 中嶋みどり (2005). 保護者における児童虐待の認知の特徴と発達心理学的要因の検討 発達心理学研究, 16, 72-80.
- 菅原正和・田村和香奈・嶋野重行 (2004). 青年期の信頼感形成に及ぼす心理学的要因 岩手大学教育学部研究年報, 64, 39-52.
- Spielberger, C. D. (1988) Manual for the state-trait anger expression inventory (STAXI). Odessa, FL: Psychological Assessment Resources. (鈴木・春木 (1994). STAXI 日本語版.
- 詫摩武俊・戸田弘二 (1988). 愛着理論からみた青年の対人態度: 成人版愛着スタイル尺度作成の試み 東京都立大学人文学報, 196, 1-16